

それと比べると、若き直江の態度は積極的であった。彼は紹介の冒頭でこう主張している。

伸びんとするものは先づ力を内に蓄へねばならぬ。日本民俗学の現状は正にそれである。併し我々の学問が将来世界に向かつて自己を出張し得るためには隣国民俗学の成果に対して絶えざる注意を払ふ事が肝要である。

日本民俗学にとって「伸び」ることが必然な趨勢であり、その具体的な形は「世界に向かつて自己を出張」することである。かつて柳田によって「世界民俗学」という形で語られ、そして「一国民俗学」の実践の中で姿を消していた世界への寄与は再びその弟子によって語られるようになった。そして各国における「一国民俗学」の成立を待つという消極的な態度ではなく、「出張」、即ち日本民俗学の方から積極的に関与する実践的な姿勢が示されている。

この「出張」はまた中国と民俗学を選んだ直江が自分に課した任務でもあった。一九四一年「中国民間説話の民俗学的研究」を提出して大学を卒業した直江は、自ら中国行きを志望し、ちょうど北京の日本中学校から求人があり、即座に赴任することとなった⁽²⁰⁾。

2 「北支」での活躍

一九四一年七月、直江広治は日本で親しく付き合った留学生の紹介で北京市西城太平橋四八号郭宅⁽²¹⁾に下宿し、これより一九四六年六月まで五年間北京で生活していた。

到着早々直江は近況を『民間伝承』に報告しており⁽²²⁾、その後たびたび通信を寄せている(本章末の表24参照)。東京から『民間伝承』をはじめ、民俗学関係の新刊⁽²³⁾が届けられており、現地でも直江は柳田や木曜会の仲間の

著作を買いあさり⁽²⁴⁾、柳田を中心とした日本の民俗学と密接な関係を持っていた。

九月に新学期が始まり、直江は地理と歴史の担当教員として授業に臨んだが、その前の夏休み（中国では七月―九月）からすでに北京の朝陽門外にある六里屯という三〇〇戸前後の村落へ調査に出掛け始めた⁽²⁵⁾。

1 満鉄調査部と日本民俗学

この年の十二月、直江は再び『民間伝承』（七―三）に通信を寄せている。

当地では有志が集り民風会なるフオクロアのささやかな会を作つて居ります。熱心なメンバーが十五人ばかりで、大体会一回報告会を開いてをります。七月には満鉄の旗田氏の北支順義県砂井村の農村調査報告があり、八月には北京近くの豊出農事情の報告が、高木氏によつてなされました。九月七日は北京の神祇講座の講演のため御来燕中の折口先生を迎へ「民俗学の分類」に関するお話を聞きました。この報告会の外に北京近郊の調査に着手致し、八月以来休日毎に三四人で採集に出掛けて居ります。東郊の広軍屯には数回参り、次第に面白い採集が集つて来ました。十一月一日から三日間ここでは収穫祭があるので、遊びに来いと云つて来ました。泊りがけで行つて見るつもりです。新京では大間知さんを中心に同好会が生まれたようですが、そのうちにお互いに連絡をとつて調査を進めたいと思つてゐます。

やや長い文章であるが、重要な情報を多く含んでおり、当時の北京の民俗学活動、とくに「民風会」という民俗同好会に関して貴重な記録を残している。

国学院大学高等師範卒業後、一九四〇年に北京に渡つた沢田瑞穂によれば、民風会は同年の春、民俗に興味を持つ北京在住の日本人によつて組織された研究会であり、従来の「支那通」と違う態度と方法で北京及びその周辺を研

究し、やがて「大陸民俗研究」へと発展していく目的を持っている。その主唱者であり世話人の一人が当時満鉄調査部の山本斌で、研究会の調査も主として山本が当時従事していた華北農村慣行調査に便乗する形で展開されていたという⁽²⁶⁾。

確かに直江の通信にも民風会の報告会で「満鉄の旗田氏の北支順義県砂井村の農村調査報告」が行われたとある。そして直江は山本斌と達光と同行して宛平県河北村の調査に出掛けたという記録もある⁽²⁷⁾。直江や沢田の著作にあった調査資料の獲得地を慣行調査の地域⁽²⁸⁾と照合すれば重なる部分が多いことがわかる。民風会の活動と満鉄の慣行調査の間には密接な関係があったと言える。

二者を繋ぐ重要人物である山本斌（やまもと・はじめ）の略歴は、一九七五年に出版された彼の著作『中国の民間伝承』（太平出版社）の奥付によると、以下のようである。

一九〇七年、山口県阿武郡萩町（現萩市）に生まれる。

一九三一年、東京帝国大学法学部を卒業する。

一九三一～三三年、同大学院で近代中国政治史を専攻する。

一九三七～四三年、満鉄調査部中国農村慣行調査班（以下「満鉄慣行班」と記す）に所属。河北、山東省農村における小作、水慣行を中心に調査する。

一九四三～四五年、同調査部北支経済調査所に所属。青海、チベット地域調査資料を刊行する。

一九四六年、帰国、海燕書店を創業。

一九六一年、学術資料刊行会を主宰。

著書は『中国農村慣行調査』『東部チベット語辞典』（以上共著）、『中国辺境漢方薬材辞典』など、ほかにソビエト体育関係の訳書が多数である。

この直江の通信を載せた『民間伝承』の新入会員欄に「北京 生田中庸 山本斌」⁽²⁹⁾と見え、台湾、満洲以外、中国からの初めての入会であった。当時、民間伝承の会の入会は推薦制を採っており、山本の入会は直江による紹介だと思われる。入会の紹介だけではなく、直江は山本の原稿の日本国内での掲載も斡旋していた。

さて一緒に民俗研究をやつてゐる満鉄北支経済調査所慣行班の山本斌氏がかねてまとめられてゐた「河北省順義の歳時記」一寸面白いものですから、別便でお送り致します。御一読の上、「旅と伝説」にでも御掲載下されば幸甚と存じます。山本氏は調査所の方の関係で木戸斌といふ筆名を用ひて居りますが、右の点は何卒御了承の程願ひ上げます（一九四二年四月十二日橋浦泰雄宛書簡、傍点原文）⁽³⁰⁾。

橋浦は早速文章の掲載を斡旋したが、実際掲載されたのは『旅と伝説』ではなく、『民族学研究』であった⁽³¹⁾。『民族学研究』八一二（一九四三年一月）に載せられた「劉悦勤稿・木戸徹マツ識」とある「北支農村歳時記―河北省順義県―」は、即ち山本斌の寄稿であった。劉に歳時記、伝説、民謡、農諺などの蒐集を依頼し、一九四一年六月に報告を受けた経緯や、この文章は劉の報告書の翻訳である旨が記されている木戸名義の序は「一九四二年四月」とあり、直江の依頼書簡に合わせて執筆したものだと思われる。

直江の同書簡では、さらに満鉄慣行班が日本民俗学に対して興味を抱き、中国調査に際して日本民俗学の理論と方法を参考にしようとする動きを示している。

尚、山本氏の慣行班の仕事は大分我々のやつてゐる事に近いので、伝承の会で発行致しました書物を慣行班として買い込みたいといふ希望があるのですが、甚だ御面倒でも左記書物若し有りましたら御送付の程願ひ上

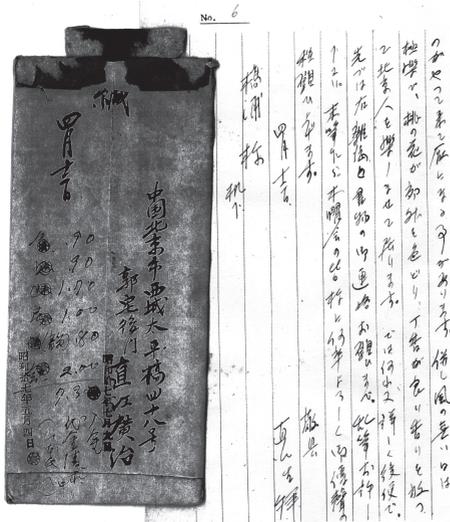


図13 直江広治より橋浦泰雄宛書簡（1942年4月12日付）

出典：「直江広治書簡」所収。

げます。

○会報 ○食習採集手帖 ○瀬川著見鳥聞書 ○居住習俗語彙 ○分類山村語彙 ○分類漁村語彙 ○服装習俗語彙

其他歳時、禁忌、葬送、農村、婚姻の各語彙品出切れのようですが、何とか手に入りましたら御都合願ひます。

○山村生活の研究 ○郷土生活採集手帖 ○遠野物語 ○日本農民史 ○郷土生活研究法

手に入りますだけお願い致します。（中略）右慣行班から連絡を頼まれて居りますので、御多忙中誠に恐れ入りますが、お願い申し上げます。

封筒裏の橋浦による書込みによれば（図13）、直江の書簡を受けて橋浦はさつそく五月四日に、『食習採集手帖』、『見鳥聞書』、『居住習俗語彙』、『分類山村語彙』と会報『民間伝承』を書留で山本斌宛に送り⁽³²⁾、その代金は七月九日に入金された。

この年に、直江の紹介で山本は直接柳田を訪ね、満鉄の中国農村慣行調査の資料を提示しながら教えを乞うた。そして慣行調査打ち切った後の一九四四年にも柳田を訪ねている⁽³³⁾。戦後、彼は前出『中国の民間伝承』の「あとがき」で柳田への謝辞を述べている。

一九四二年に調査資料をもって帰国し、故 柳田国男先生を訪れて調査法その他について教えを乞うた。それが機縁となって戦後の一九五七年には民俗学と歴史学についての『講演集』の整理などのお手伝いもした。本書執筆にあたっては、このときに柳田先生から学んだことが大きな支えと励みになった³⁴⁾。

山本と直江を通して、戦前代表的な大規模の中国実地調査は日本の民俗学と関係を持っていた。柳田に何を教わり、日本民俗学の知識と経験が如何に満鉄の慣行調査に反映されていったのかを考察することはこれからの課題であらう。

2 折口信夫の中国旅行

直江広治が『民間伝承』への通信で言及した折口信夫の「北京の神祇講座の講演」は、折口信夫にとって唯一の外国旅行でもあった。折口信夫年譜の一九四一年では、「八月、中華民国に旅。一日、北京到着。三日から北京で皇典講究所の講演会（三日間）。北京武道殿で『古代人の信仰』を講演。八日、部隊への学術慰問の後、山海関・南京・蘇州・杭州を巡り、九月上旬、上海より帰国³⁵⁾」となっている。

折口が中国旅行の旅先より知人に送った葉書八通³⁶⁾と、阿部正路・芳賀日出男「折口信夫の中国行」（一九九七年）³⁷⁾によって行程を訂正、補充すると、以下のようなようである。

八月二二日に東京大井警察署長より身分証明書を発給される（阿部）。

八月二七日に出発し、九月一日夜十一時北京に到着する（二五二番京翠明荘より東京高崎英雄宛絵葉書）。

九月三日～五日に皇典講究所華北総署（一九四一年三月に設立）が主催の短期神祇講座で講義をする。

六日に山海関を見学（二五三番北京華北総署より金沢第四九部隊附少尉藤井春洋宛絵葉書、二五四番北京翠明荘より埜

玉西角井正慶・富子宛絵葉書。

七日到北京武道殿で「古代人の信仰」を講演する⁽³⁸⁾。帰り道の変更で北支軍報道部より九月九日から十月十日の間に北京―南京―上海―東京を通行できる証明書を発給される(阿部)。夜、民風会で「民俗学の分類」の話をする(直江、沢田)。

八日に部隊への学術慰問(二五五番山西省太原教育庁中村浩・治枝宛絵葉書)。

日付不明、一人で南京に飛ぶ(二五六番東京金田一京助宛絵葉書)。

日付不明、蘇州の寒山寺、楓橋などを見物し宿泊(二五八番金沢江尻初枝様方藤井春洋宛絵葉書)。

日付不明、嘉興で三等車に乗換え、杭州に着き、西冷飯店に泊る(同前)。

日付不明、杭州見学(二五七番東京青池竹次鳥船社様・高崎英雄宛絵葉書)。

日付不明、上海に到着する(二五九番東京河合峻策宛絵葉書)。

帰国。年譜の次の条は九月二日信州での講演であった。帰国は九月の中旬の後半であろう。

当時折口は五五歳であり、虚弱な彼にとつて中国の旅は体への負担が大きく(二五四番⁽³⁹⁾)、途中で一旦八日の学術慰問後に帰国することを考えた(二五三番)ほどである。しかし、彼はまたこの旅を望んでいた。

武漢攻略のために太田陸郎が召集されたのが一九三八年七月であるが、その一ヶ月後の八月、内閣情報部は、菊池寛、久米正雄など作家十三名を招集し、ペン部隊を組織して漢口攻略戦に従軍することを計画した。八月二日付、長野県軽井沢より大阪鈴木金太郎宛の絵葉書で、折口は「漢口従軍連の仲間に入りそこねた。ここに居つたので、届け出が遅れました」(二三四番、一八八頁)と嘆いている。二週間後の九月十日、同じく鈴木金太郎宛の封書巻紙でさらに同伴にふれている。

漢口従軍（文士従軍のあれ）の願ひを出してあるので、何時、支那へ行けるかもしれません。行けば、恤兵部からです。まあ、たまたまの一つも受けて来れば、しつかりした歌でも出来るかと思ひます（二三六番、一八九頁、傍点原文）。

折口信夫は戦場に赴く兵士に心動かされる魂を感じており、前線の兵士を慰問しに行く志を前から持っている。北京到着後の絵葉書第一便にも「八日は学術慰問といふことを試みる。兵隊さんに喜ばれば幸福だと思ひます」（二五二番）と述べている。

それでは、折口は中国をどう見ていたのか。

一、中国は遠い。——「五日がかりで北京に到着、相当疲れました」（二五四番、前記）

二、中国は広い。——「北京に来ればあへると思うてゐた。地図の上で考へれば、何でもないが、時間を当つて見れば、三十何時間かかる。これではとても、えう来まいと思つてゐました。こちらがすんでも、太原はあまり遠すぎるので、残念乍ら南飛してかへる」（二五五番）

三、北方の気候にはなれない。——「当地のなかなか暑く、所謂北京の秋も杳かな心持ちがする」（二五三番）

四、所謂名勝は俗悪であった。——「寒山寺、楓橋など、俗悪の中に、まう少しとりえがあつてくれればよかつたのと思うた」（二五八番）

五、中国人はあまりいい人は多くない。——「嘉興は三等車ばかりだが支那でも、これにのる人々にはよいのである」（同前）

材料が少なく、折口の中国観というほどのものを抽出することができないが、その中国イメージは大よそマイナス的なものが多いことがわかる。中国は折口の唯一の海外経験であるにも拘わらず、戦前戦後通じて本人はあまり言及していない。折口にとっては隣の大陸は、戦争で日本人の軍隊があるのでなければ、まったく関係のない世界

であった。

折口は、北京滞在中、民風会で講演したことがある。沢田瑞穂によれば、その内容は「民族学と民俗学との方法上の異同」であり、民族学は異民族を、民俗学は母国をそれぞれ研究するものとし、民俗学の最終目的を「国民の心意情緒の内奥とその表現形式とを探求すること」⁽⁴⁾とする趣旨であったという。

自民族と他民族という対象の差は、柳田民俗学が二つの「ミンゾクガク」の区別に対するオーソドックスな説明であり、そして自省によって心意まで達する研究の可能性をもって民俗学の優位性が強調されるのである。しかし、この論理は民風会の中でそのまま受け入れられなかったようである。

折口講演の事実を述べた後に示された沢田瑞穂の理解は代表的であった。即ち中国に長い歴史があること、同じ東洋の隣国であること、そして同一国民でも世代の差によって異邦人の学と変わらぬものになりかねないことなどを理由に、中国での民俗研究は、ポリネシア、メラネシアなど未開人の風習を取扱う民族学と同一次元ではないと沢田は説いている⁽⁴⁾。

沢田の主張は、日本人による中国民俗の研究は、異民族を対象としながら、民俗学の研究であるといえる。とくに国民の世代差をあげて同国人の自省という言説を相対化するところが注目されよう。同じ国民であるから深く理解できるというのは可能性についての言説で、具体的な実践における必然とはいえない。中国で民俗調査研究活動を展開する日本人にとって、「一国民俗学」における「郷土人」の特権化は当然反論されるべき論理だといえよう。しかし沢田の関心はもっぱら中国での自分たちの行動を正当化するところにあり、中国は、日本での主流の理論、方法そのものを反省させる新たな現場や契機になりえなかったのである。

3 その後の民風会

一九四二年四月十二日付橋浦泰雄に宛てた書簡では、直江広治は北京の民俗学活動の近況を伝えている。

当地の民風会も其後ささやかな会合を続け、日曜を利用してはあちこち歩き廻つて居ります。何と言つても同志が少ないので心淋しく思つて居ります。大陸民俗叢刊と云つたものでも出して、少し呼びかけて見ようかなど内輪の者で話し合つて居ります。併し先日早川孝太郎さんが御来燕になつて北京大学で「日本民俗学」といふ講演をされたり、其他の研究所でも次第に此の学問に注意を向け出して来たようです。

同じ書簡では「輔仁大学には「⁽¹⁾ラマソン」、エーデル師等を中心に民族学の研究会が作られ、こつこつやつてゐるようです。又仏人が矢張り研究会を作らうと劃策して居りますし、我にも負けずに頑張らうとしてゐます」と報じている。民風会が活動し始めた一九四〇年代初め、趣向は異なるが、北京において後述する輔仁大学の付属東方人類学博物館を中心としたドイツ系の研究グループ、そしてフランスの中法漢学研究所⁽²⁾の活動があつた。中国におけるヨーロッパの研究団体の活躍は日本人による中国民俗研究への刺激となつたのである。

当時の民俗学研究は広範囲から集めてくる多くの民俗事例に依拠するので、とりわけ資料収集の初期段階では、まず運動でなければならなかつた。北京でも状況は同じであり、叢書の刊行は運動を促す方法として考えられたようである。「大陸民俗叢刊」という名は「大陸民俗研究へと発展する研究会」という民風会設立の目的を想起させる。沢田瑞穂の回想によると、一九四一年の末に、山本斌から北京の日本人経営の出版社と話がつき、自分が集めた昔話『戀城夜譚』を大陸民俗叢刊の一冊として出版する計画があつたが、発行直前、製本上の失敗により全部裁断されたといふ⁽³⁾。

同時に、既に日本では多くの成果を収め、社会的地位を確固にした日本民俗学の直接の関与とその積極的な影響が期待された。当時の早川孝太郎は柳田系統に属していないが、日本ではすでに名著『花祭』（岡書院、一九三〇年）などの業績により民俗学者としての地歩を固めていた。彼が一九四〇年十月から十一月にかけて朝鮮、満洲を旅し

たことは、〈在奉天 早川孝太郎〉という署名で『民間伝承』に寄せた通信によって知ることができる⁽⁴⁴⁾。その時のスケッチだと思われた絵は、『旅と伝説』の表紙(一九四一年七月号に「蒙疆南洋河」、一九四二年一月号から「輯安將軍塚ニテ(オボ)」を飾っていた。直江のこの通信によると、早川は一九四二年春にさらに北京に行き、北京大学で「日本民俗学」を講演したことになる。この北京の旅についてのどのような背景があったのかは詳らかではないが、一九四一年九月の折口信夫よりわずか半年後、早川も同じく北京で日本民俗学の概論について講演したことは、日本の民俗学者の中国との関わりが確実に増え、中国での民俗研究との関係もより直接的になったこと、そして現地では日本民俗学に対する関心が高まったことを物語っている。

4 山西学術調査

民風会の活動などで授業を休むことに起因して学校側との関係が悪化し、直江は一九四二年二月に日本中学校を辞めてしまったが、四月の末に、東京から山西学術調査団の一行が北京にやってきた。

東京帝大地理学の多田文男(一九〇〇―七八年)は一九四〇と一九四一年に隊長としてゴビ砂漠学術探検を実施したが⁽⁴⁵⁾、山西で現地派遣軍から資源調査の要望を受け、学術調査を行うことで軍との間に意見の一致を見た。一九四一年春に資源科学諸学会連盟が結成され、十一月に現地軍より学術調査研究団の派遣を正式に依頼され、準備が進められていた。その後一九四一年十二月八日に、「天然資源に関する基礎的研究に向かつて」の「国立の機関」として文部省直轄の資源科学研究所が設立されると、山西学術調査研究団が研究所最初の活動となった。

興亜院の援助のもとで、地理、地質、鉱物、動物・植物、人類の五研究部門と絵画部、庶務部、映画部、報道部からなる調査団は、四月二三日に東京で東海道線に乗り、瀬戸内海で半貨物船に乗換え、二八日深夜北京に着き、二九日午前十時北京神社で結団式が行われた。

調査団の地理班に直江の恩師でもある東京高師の花井重次教授が名前を連ねている。直江は調査団の宿舎である

翠明荘に訪れ、花井の斡旋で人類先史学班の一員となった。その理由は「民俗学を専攻しているということと、中国語が話せるという点」⁽⁴⁶⁾であったという。人類先史学班に班長谷口虎年（慶応）、成員は江口為蔵（慶応）、小野勝年（華北交通囑託）、野村正良（学士院囑託）などのメンバーがおり、専門は考古学や形質人類学、言語学などで、最初から風俗習慣を担当する者がいなかった。調査事項の「民俗学的調査研究（民間伝承）」という項目は⁽⁴⁷⁾おそらく直江が班員になってから加えられたものだと思われる。

この調査については、後援となった朝日新聞社の随行者・宮本敏行による『山西学術紀行』（新紀元社、一九四二年）及び「第一次山西学術調査研究団の編制及行程」（一九四三年四月）⁽⁴⁸⁾に詳しい。それらの記録によれば調査団の一員としての直江の活動を知ることができる。

五月一日の夜、調査団一行は太原に向かい、翌日の午後到着した。三日の午前には太原神社参拝、正午現地軍当局に申告、会食、午後二時半から準備会、各方面との打合、晚食、必要品の調達などをする。四日、五日には午前中に打合会を行い、午後博物館や太原製鉄所及び種畜場などを見学した。正式な調査は六日からであった。五月六日、七、八日、第一次調査として、潞安、垣曲、蒲州の三隊に分けて山西南部地区を調査するが、直江は第三班（蒲州地区）に所属した。

谷口虎年を班長とする第三班は他に地理学の花井重次、吉村信吉、木内信蔵、人類学の野村正良、東洋史・考古学の小野勝年、西亨、絵画部の田内駿士などがおり、中国で現地参加した「綿産改進」の鈴木堯司、平野三郎、葛長崑もこの班に入っている。班附として現地軍の古賀大尉、守永兵長、杉崎上等兵、衛生調査班長田軍曹、片岡兵長、鬼島上等兵、長井上等兵や『太原新聞』の亀田記者等の名前も見られる。

日程は太原―大谷（六日）―臨汾（七、九日）―運城（十、十一日）―虞郷（十二、十三日）―蒲州（十四、十六日）―風陵渡（十六、十七日）―運城（十七、十九日）―太原（二〇日）とある。特に蒲州では大雨の中で直江は谷口、野村などと共に県公署で伝説だと思われていた「冥婚」（死者結婚）がまだ現実として行われていることを知

り、大いに喜んだという。

五月二五日～六月十六日は調査団全員で参加する第二次調査を行い五台山地区を踏査した。太原から同蒲線で忻州、崞県に、日本館で宿泊してからトラックで繁峙に着く。

ここから分かれて自然科学を中心とした本隊が五台山中に赴いて踏査する一方、人類班として谷口の引率のもとで、江口（生体計測其他）、野村（言語）、小野（考古）、直江（民俗）、木内（人文地理）の一行は五台山麓一帯の町を調査し、繁峙―代県―原平鎮―忻県―定襄―五台県城と進む。当地では新民会の協力で地元生まれの男性五〇人、女性二〇人に対して生体計測を実施し、それ以外当地で一番家族の多い家を見学し、一番の物知りに会い、村の戸籍簿なども閲覧した。

六月十三日、全団員は五台県城の兵営に合流し、十五日、トラックで河辺村に移動し、そこから汽車で太原駅まで戻る。太原では現地軍、山西産業、太原市民を対象とする報告会を行った後、北京に帰り、支那方面軍、興亜院、その他官民各方面に帰還申告や報告をした。六月二五日から三日間で、朝日新聞北京支局の後援で「五台山絵画展覧会」が王府井の松坂屋において開催され、その最終日に北京飯店の屋上で打上げの晩餐会が催された。二七日、北京神社で解団式が行われた。

この調査については正式な報告書は出版されていない。一九四三年十二月執筆された北村四郎の「山西學術調査研究団採集キタ科植物」は、一九八九年十二月になってようやく発表された⁴⁹し、前記の『山西學術探検記』（一九四三年四月）も、その「序」に記されたように「調査団各班長の手記がここの一本にまとめられた」ものでしかなかった。

直江はこの山西調査の報告として『地理学』十月号に「山西の習俗」、「北支」十月号に「山西村落に文化を運ぶ人々」をそれぞれ投稿した。これは直江の中国に関する最初の調査研究発表であり、一九六七年『中国の民俗学』をまとめる際、「社会習俗」の主要なる構成部分でもある。この中で『北支』はこれから直江にとって重要な発表

機関であった。当雑誌は華北交通株式会社資業局編の月刊⁽⁵⁰⁾を考えると、直江と当雑誌の関係は、山西調査中で共同行動していた同社嘱託の小野勝年によるところが大きいと思われる。

5 石田英一郎との再会

一九四二年十一月十一日柳田国男宛書簡の追伸では、直江は『地理学』と『北支』への投稿を報告しているが、同じ書簡でまた大間知篤三や石田英一郎と連携する意欲を示している。

新京の大間知さんが学生を連れて山東から蒙疆を廻つて北京に寄られたので、今日久し振りに色々お話をする事が出来ました。新京には早く学会が出来ましたし、張家口にもその気運が高まつてゐるようで、お互いに連絡を取つて、こちらの民俗調査をやりたいものと話し合ひました。

大間知篤三を中心に新京民俗同好会が発足したのは一九四一年七月であったが、前述した直江の『民間伝承』への会員通信第二便(同十二月)では、すでに「そのうちに」と連絡する意欲を示していた。

直江と石田英一郎との出会いは、在学中の一九四〇年柳田の指示で紹介状を持参して「帝国学士院内の東亜諸民族調査室」に訪れたときであった⁽⁵¹⁾。周知のように石田と柳田の個人的な関係は決して親しいとはいえず、学問的な立場も大きく異なるものがある⁽⁵²⁾。前年の九月に石田がすでにウィーン大学での留学を終えて帰国したこと、そして東亜諸民族調査委員会嘱託になったのが一九四〇年七月であったことを考えれば、翌春に卒業を控える直江の就職斡旋を石田に求める思いが柳田にはあつたかもしれない。

その後直江の中国行きが決まったこともあり、石田との間には密接的な連絡が見られず、この一九四二年の夏に二人が再会したのである。石田は前年樺太の氏族組織調査に続いて華北と内蒙古での回族調査を終えたばかりであ

つた(53)。

石田には中国での調査はこれが初めてであるが、中国経験は前からあった。大学二年の一九二五年の夏休みに彼は京都帝国大学社会科学研究会の仲間である大田遼一郎と中国に渡り、満洲、河北、山東、天津、北京を旅し、中江丑吉、満鉄の伊藤武雄、中国革命論の鈴木言一や、建国後国家主席にもなった若き劉少奇を含む中国の学生運動の指導者に会った。その後一九二七年の二、三月に日本共産党から派遣され水野成夫に同行して神戸―台北―福州―上海―武昌、漢口を旅し、「中国の巨大さとその民族の底知れぬ潜在力といったものを、身にしみて感じ」たという(54)。

この一九四二年の夏は十数年ぶりの北京訪問であった。前回の自由活動とうって変わり、後年の言葉でいえば、「侵略者の武力で押えた点と線だけに沿い、その武力の保護を背景に行った調査研究」であった。

盧溝橋事変勃発後、日本は蒙疆自治を推進し、張家口は一九三七年九月に成立した察南自治政府の政府所在地となった。十一月に察南、晋北、蒙古の三つの自治政府の代表によって蒙疆聯合委員会がつくられ、張家口を委員会所在地とした。一九三四年に発足した蒙古善隣協会は一九三八年に在外本部を張家口に設置し、張家口は蒙疆地区の政治文化中心となるが、軍部の影響が大きく、最高顧問は満鉄出身の金井章次であった。善隣協会の張家口本部に調査部が設けられており、石田の回族研究にあたって調査部の助力が大きかった。調査部は後一九四四年一月に西北研究所と発展するが、石田が訪れた一九四二年夏、風俗習慣を含む総合調査の気運は既に高まっており、その情報は石田を通して直江に伝わったのである。一年前では「そのうちに」となっていた連絡の意欲は、この時期になると「話し合いました」と、実践に向けての議論が始まった。